

2019. 12. 31

畑 啓之

日本経済は何とか水平飛行の一年ではあったが 今しばしすべてはアメリカだのみか

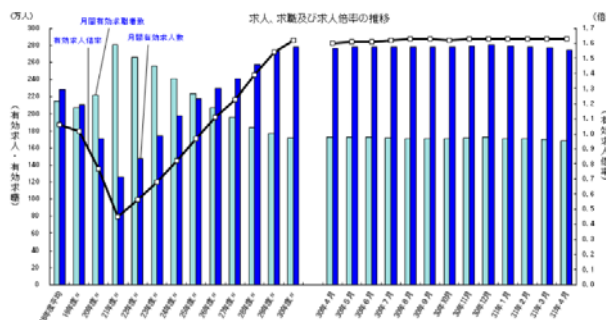
本年も素晴らしいとは言えないが、消費税引き上げにもかかわらず日本経済は何とか持ちこたえている。世間では昨年と比較して少し景気に影が見え、来年への不安が聞こえる。一部の消費財ではその売り上げが落ちていることも事実である。

来年はいよいよ東京オリンピックの年。多くがその恩恵にあずかり景気の高揚を期待しているが、関連する建設需要は多くの工事がすでに終わっていると考える。残るは海外からのビジターによる消費の拡大であるが、どこまで期待できるか。また、オリンピック後の景気の維持にも疑問が残る。

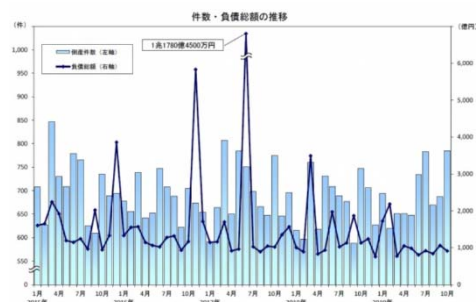
日本の今の景気はアメリカの金融政策によるところが大きく、またアメリカの株高によるところが大きい。だぶついたお金の行き先が一気に金融市場に流れ込み、一種のバブルを引き起こしているのではないか。大きく膨らんだ風船はいずれは萎む運命にある。一挙に爆発的に小さくなるのではなく、少しずつ空気が抜けるような、そんなソフトランディングを期待する。

世界各国が協力して大きく膨らませた風船を前に、来年がどのような年となるかを今思いめぐらしている。まだバブル崩壊の兆候は見えないが、何かのトリガーで崩壊が起こるとその速度は速い。ただ一つ言えることは、先見の明と技術力のある会社は世間の景気に関係なく発展していけるということである。本年は下に引用した日本経済新聞にもあるように5G関連の会社が注目を集めた。来年の主題は何であろうか。

有効求人倍率 (厚生労働省)



倒産件数と負債額 (東京商工リサーチ)



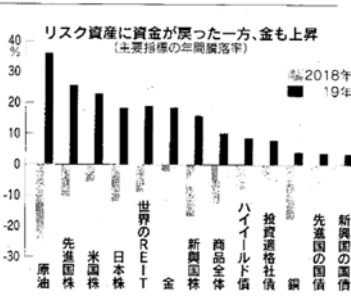
右の写真は兵庫県明石市の魚の棚商店街の今日の風景である。この写真からも景気の悪さはなんら感じられない。



日本経済新聞
2019年(令和元年)12月31日(火曜日)

2019年は世界的な利下げを追い風にあらゆる資産の価格が上昇した。日経平均株価は30日、年末終値としては1990年以来、29年ぶりの高値を付け、世界の株式時価総額(3面きょうのことば)は86兆(約9400兆円)と過去最大に膨らんだ。株高時に値下がりする傾向がある債券や金も値上がりした。グローバル経済が減速するなか、米中貿易交渉の進展や成長再加速を先取りする形で進む力ネ余り相場は危うさもはらむ。(関連記事3面に)

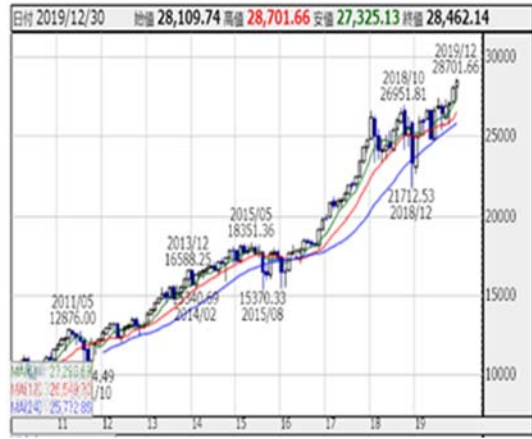
景気は停滞膨らむ副作用



日本経済新聞 2019.12.31

緩和頼みの世界資産高
日経平均大納会 29年ぶり高値

NYダウ



5G関連株高けん引

2019相場はハイテック株がけん引した
時価総額の増加が大きい銘柄

順位	銘柄名	時価総額(年間増減率)
1	アドバンテスト	1兆2293億円(174.5%)
2	エムスリー	2兆2425億円(134.8%)
3	武田薬品工業	6兆8287億円(131.9%)
4	日立ハイテクノロジーズ	1兆660億円(124.0%)
5	第二共済	5兆1247億円(105.9%)
6	オリンパス	2兆3154億円(100.2%)
7	東京エレクトロン	3兆3926億円(91.2%)
8	オービック	1兆4700億円(73.9%)
9	TDK	1兆6056億円(60.5%)
10	光通信	1兆2768億円(59.8%)

ESGも重視
変わる評価基準

2019年の日経平均株価は年間で18%上昇し、東証1部の時価総額は60.3兆円に上った。高値けん引したのは次世代通信規格「5G」の関連銘柄だった。世界的なESG(環境・社会・企業統治)の潮流も大きなテーマで、統治改革が進んだ企業が評価され、ESG(環境・社会・企業統治)は概して評価が高まった。株高は19年の出遅れ銘柄の挽回が中心だった。(1面参照)

アドバンテスト 時価総額伸の自立

時価総額1兆円以上の企業のため、昨年末比でもっとも時価総額の増加率が上がったのは半導体製造設備のアドバンテスト。約1兆の1兆の300億円に上った。5Gの普及がけん引された。同社は半導体製造設備の東京エレクトロンに9割増した。5Gの普及がけん引された。同社は半導体製造設備の東京エレクトロンに9割増した。5Gの普及がけん引された。同社は半導体製造設備の東京エレクトロンに9割増した。

期待のある企業にも資金が回った。国内の医師の9割が利用する医療情報プラットフォーム「EIM」を展開するエムスリーの時価総額は高値になった。LIDAR(レーザー)の経営統合を決めたエポック・システムズも期待された。企業の社会的責任を重視するESG(環境・社会・企業統治)の潮流も大きなテーマで、統治改革が進んだ企業が評価され、ESG(環境・社会・企業統治)は概して評価が高まった。株高は19年の出遅れ銘柄の挽回が中心だった。(1面参照)